

KETSU
OKI
EPISODE IV

GREETING

ご挨拶

本日はお日柄もよく、お足元の悪い中、けつおけ!第4回「不」定期演奏会にお越しくださいませ、まことにありがとうございます。

今回めでたく第4回を迎えた、けつおけ!「不」定期演奏会ですが、「4」という数字は不吉であり、また素数ではないため、飛ばして第5回にしようしようと駄々をこねてみたのですが、ジョージ・ノレーカス、ハソソソ・フォード、ステューブ・スピノレバーク、ハンバーグラークほか各界の著名人、ならびに角界の力士多数から猛反対にあいまして、泣く泣く諦めたという経緯があった気がしますが定かではありません。

ところで、今回のコンサートのサブタイトルが"May the 4th be with you!"という冗談のようなフィット具合ではありますが、5月4日が本番になったからそのサブタイトルにしたのか、そのサブタイトルにしたいから5月4日を本番にしたのか、鶏が先か卵が先かという論争に発展しそうな事案ではございますが、それはまた次回のコンサート以降、別の機会にお話するという事でよろしくお願い申し上げたい所存であります。

また、なぜ「ケツバット・キネン・オーケストラ」なのかにつきましても、紙面のスペースの都合上、次回以降に持ち越しとさせていただきます。謎を解きたいと毎回コンサートに足をお運びくださっている熱烈なケツバッティアンの皆様には心よりお詫び申し上げます。なお、わたくし西園寺エリカと指揮の市原氏は、武藤敬二とグレート・ムタくらい別人ですので、くれぐれも事実誤認なきよう、お願いいたします。

それでは、短い時間ではございますが、ケツバッターズ一同、一生懸命演奏いたしますので、最後までお楽しみいただければ幸いです。

"May the Muse be with you!"(音楽の女神がともにあらんことを!)

2014年5月4日

けつおけ!代表 西園寺エリカ(16)

指揮

市原雄亮



新潟県上越市生まれ

成蹊大学法学部法律学科卒

4歳よりピアノを始める。中学時代にチューバに出会い、後にトロンボーンに転向。

高校卒業後は音楽大学へは進まず、法学部に学ぶ。

法学と指揮を学びながら大学を卒業。2006年より指揮者としての活動を開始。

2011年には、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の副指揮者オーディション第一次審査を突破。

第二次審査にて神奈川フィルハーモニー管弦楽団を指揮する。惜しくも落選したものの、常任指揮者である金聖響氏やオーケストラのメンバーより指揮、リハーサルを評価される。その後、金聖響氏のリハーサルに参加し、研鑽を重ねる。

トロンボーンを高階恵、三輪純生の両氏に、指揮を金丸克己氏に師事。

コンサートマスター

小林明日香



愛知県出身。

東京藝術大学音楽学部卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程修了。

全日本学生音楽コンクール全国大会入選、KOBЕ国際学生音楽コンクール優秀賞等、数々のコンクールにおいて優秀な成績を収める。

国内外の音楽祭や講習会に多数参加し、巨匠ベラ・カトーナ氏、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団第一コンサートマスターのダニエル・シュタブラーヴァ氏をはじめとした著名な演奏家のレッスンを受講、研鑽を積む。

mihimaru GT、Acid Black Cherry、ジェロ他、様々なアーティストのレコーディングやライブ、イベント、PV撮影に参加し、ジャンルにとらわれることなく、多岐に渡り活動を展開している。

TODAY'S MENU

本日のお品書き

Die Fledermaus Overture Johann Strauß II(1825-1899)

「こうもり序曲」 ヨハン・シュトラウス2世(文政八年～明治三二年)

The Waltzing Cat / The Typewriter / Fiddle Faddle Leroy Anderson(1908-1975)

「ワルツィング・キャット / タイプライター / フイドル・ファドル」 ルロイ・アンダーソン(明治四十一年～昭和五〇年)

"STAR WARS" Suite for Orchestra John Towner Williams(1932-)

「スター・ウォーズ組曲」 ジョン・ウィリアムズ(昭和七年～)

I. Main Title

1. メイン・タイトル

II. Princess Leia's Theme

2. レイア姫のテーマ

III. The Imperial March(Darth Vader's Theme)

3. インペリアル・マーチ(ダース・ベイダーのテーマ)

IV. Yoda's Theme

4. ヨーダのテーマ

V. Throne Room & End Title

5. 王座の間とエンドタイトル

-Intermission- (休憩)

Symphonie Nr.6 "Pastorale" F-Dur op.68 Ludwig van Beethoven(1770-1827)

「交響曲第6番(田園) へ長調 作品68」 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(明和七年～文政一〇年)

I. Erwachen heiterer Empfindungen bey der Ankunft auf dem Lande

1. 田舎に到着したときの愉快的感情の目覚め

II. Szene am Bach

2. 小川のほとりの情景

III. Lustiges Zusammensein der Landleute

3. 田舎の人々の楽しい集い

IV. Gewitter und Sturm

4. 雷雨、嵐

V. Hirtengesänge - Frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm

5. 牧歌、嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち

...and?

ある音楽家の手記

西園寺エリカ

この手記は、突如失踪したある音楽家の自宅から発見されたものである。永らく警察によって保管されていたが、最近になって新聞社が入手した写しを手に入れた。何を言っているのか判然とせず、我々の理解を超えている箇所が多く見られるが、失踪の真実に迫る貴重な資料として公開する事とした。

こうもり序曲。私はこの曲について調べていました。そして、ある事実に気づいてしまったのです。気づいてしまってよかったのかどうか、今となっては分かりません。

オペレッタそのものの名前になっている「こうもり」とは、登場人物の一人であるファルケ博士がつけられたあだ名です。「こうもり」はドイツ語で「Fledermaus」であり、「Die」は定冠詞ですから、「Die Fledermaus」でそのままズバリ「こうもり」というタイトルのオペレッタとなります。そのオペレッタの開幕で使われているのが、こうもり序曲。こうもりの劇中に出てくる音楽を繋ぎ合わせ凝縮したダイジェストともいえるのが、こうもり序曲。

この「Die Fledermaus」を無理やり日本語で発音するならば、「ディー・フレーダーマウス」。何やら格好がよく、こうもりという感じが非常に伝わってくるではないですか。ディー・フレーダーマウス、ディー・フレーダーマウス。フレーダーマウス……。私はフレーダーマウスの虜になってしまいました。なんて素晴らしい響きなのだろう。それからというもの、四六時中フレーダーマウスと言わずにはいられなくなってしまったのです。

朝起きたらフレーダーマウス。トイレに入りフレーダーマウス。食事をしながらフレーダーマウス。電車に乗ったらフレーダーマウス。そのうち、おはようからおやすみまでフレーダーマウスに暮らしを見つめられている事に気がつきました。フレーダーマウスが私の事を朝も夜もなく監視しているのです！ あいつが！！ フレーダーマウスが！！

知人にフレーダーマウスに監視されていると助けを求めても取り合ってもらえませんでした。医者にもかかりましたが、気のせいの一言で相手にされませんでした。それでもフレーダーマウスはいるのです！ 確かに！ ここにも！ そこにも！ いたるところに！

私は恐怖のあまり食事が喉を通らず、睡眠が取れなくなり、次第に衰弱していきました。このままではいけない。フレーダーマウスに身を滅ぼされてしまう。そう分かっているけど、フレーダーマウスが頭の中を駆け巡るのです。そしてある時、決定的な事実に気づいてしまいました。

ドイツ語では「Die Fledermaus」。実に格好がいいものです。だから私は虜になったのですから。ところが、英語にしたらどうなるんだろうと考えてしまった時、運命の歯車が動き始めたのかもしれない。

英語でこうもりは「Bat」。Dieは定冠詞ですから「The」。つまり、ディー・フレーダーマウスという実にもったいつけた響きのいい言葉が、英語にすると「The Bat」、「ザ・バット」になってしまうのです!!! ああ！ なんてことだ!!! こんな……こんなダサイ名前があつていいのだろうか!!! 神を冒瀆している!! バット！ ザ・バットだなんて！

それに気づいてからというもの、フレーダーマウスの監視は日に日に厳しいものになってきました。最近では家の中にまで侵入をしてきているようです。朝目覚めると、あいつの足跡がお風呂マットについているのです。恐ろしい。私は恐ろしい。神よ、なぜ私がこんな理不尽な恐怖を味わわねばならないのでしょうか。

恐らく、やつが私の前に姿を現し、とても不吉な事が起こるのは時間の問題でしょう。そうなる前に、この真実を世間に知らせるべく、こうして手記を残しておこうと思ったのです。ディー・フレーダーマウスは英語でザ・バット。ザ・バットだ。なんてことはない。ザ・バットなのだ。なんてダサイんだ！

ああ、ついに私の机の前にやつが。言葉では到底表現できない姿をしています。人間がこんな恐怖を感じる事があつていいのだろうか。恐らくこのまま私は失踪するでしょう。だが人間はこんなやつに屈しない！ きっと誰かが真実を語り継ぎ、いつか光の下に引きずり出す日がくるのだ！ ああ！ ザ・バット！ バット！ ケツバツ

手記はここで終わっている。手記の内容から、精神的にかなり錯乱していた事は間違いないと思われる、何が彼をここまで追いつめたのか。失踪の手がかりらしきものは一切発見されなかった。警察は誘拐事件として捜査を続けているが、迷宮入りが間近である。唯一、彼が失踪した部屋には、子供用のカラーバットが転がっていたという。事件には無関係として処分された。

連載小説 第四回

「我々はなぜスター・ウォーズを演奏する事になったのか」

ヴァイオリン三浦ルトでブラームスの交響曲第一番を演奏するという、ある種の拷問に近い演奏会を駆け抜けてから約三ヶ月。その達成感と喪失感からケツバッターズは全員引きこもりになっていたが、そろそろ次に向けて動き出さねばならぬと運営ケツバッターズは決意した。第四回に向けての会合を開くため、心の拠り所としている居酒屋、居間居間に運営ケツ一同は集っていた。

　　ヴィオラの裏番長と噂される浪山が口火を切った。

「いやあ、皆さん前回はお疲れ様でした。ヴィオラなんて二浦ルトでしたからね。死ぬかと思いましたよ。私は骨折していて受付やつてたんですけどね！　ははは！」

　　二という数字にヴィオラの九保がすかさず反応する。

「二かける四は！　はち！　今回は八浦ルトにするぞ！」

またかという具合で顔を見合わせる一同。九保は過去に起こったある事件以降、八という数字に囚われてしまった。一方、八という数字に反応するbott、すなわちロボットではないかという話も最近ではまことしやかに囁かれている。

「びあ！　飲みたい！　はやく！　生中はち個！　はち秒以内！　はやく！」

　　勝手に注文を取る九保。単語で会話するあたりがbott説を一層強固にする。

「八より三がいい！　素数！　素数大好き！　ビール三つに変更で！」

　　勝手な事を言い出したのはトランペットの萩原だ。彼女もまた、数字に取り憑かれてしまった者である。

「ダメ！　八だ！　はち！」

「やだ！　三！　五か七でもいいケド！」

　　いつも喧嘩が始まる。

「まあ落ち着いて。一は素数だ。そして一の六倍は六だ。さらに六に二を足せば八になる。だからビールの注文は六でいい。そうだろう？」

　　手馴れた具合で二人をいなすのは、プロニートの石原だ。

「確かに！　それならいいぞ！　はち！」

「六も素数の仲間なんですネ！　やった！」

「石原さん、一は素数じゃ……！」

　　ヴァイオリンの大林が何か言おうとしたが、ビールの到着にかき消された。

「ビイイウ六つ、ウマツツタシャツチャー！　ゴウツクイドウソオオオ……！」

「なにいつてだこい！」

　　威勢のいい店員の胸倉をつかんだのは武闘派トロンボーンの黒井だ。名前の通り、黒い世界との繋がりがあるという噂があり、皆目を合わせようとしな

「まままままあまあ。元気があ

るのはいい事じゃない。元気があれば何でも出来るってジャイアント馬場も言っ

てたし！」

アンダーソンに関する考察

明日も見てくれるかな？　アンダーソン君。

　　と言ったのはエージェント・スミスだったかタモリだったか忘れてしまったが、私にとってアンダーソンと言えばルロイ・アンダーソンの事である。

　　ルロイ・アンダーソン。リロイ・アンダーソンとも言われるその人は、アメリカで生を受け、有名曲を多数作曲し、一時代を築いた作曲家だ。かのジョン・ウィリアムズが「アメリカ軽音楽の巨匠」と評するくらい偉大な作曲家である事は、ウェブで検索したらすぐに分かった。だから次にお送りする曲がジョン・ウィリアムズ作曲の「スター・ウォーズ」なのだ。というのは捏造であり、今こうして執筆している時に気づいた偶然である。偶然とは怖いものだ。

　　ワルツィング・キャットは「踊る仔猫」と訳される。その名の通り、仔猫が踊っている情景を音楽で表現した楽曲と考えて間違いないといえよう。猫が踊るのかどうか、というところが学術上の論点になると考えられるが、私の知る限り、猫は踊らない。しかし、この楽曲が存在する以上、アンダーソンは猫が踊っていた場面を目撃したのではないだろうかという仮説は否定できず、我々は猫が踊っているところを想像しながら演奏しなければならない。猫が音楽に合わせてSTEPするなどという論文を発表すれば世間から笑いものにされると思われるが、私は、アンダーソンがSTEP猫ちゃんを少なくとも200回は目撃した可能性があると思像している。ところで、曲の最後に犬が吠え、猫が逃げだすというオチが待っているのだが、犬の鳴き声はどうするのであろうか。これを書いている現在、プロトコールは公開されていないようだ。

　　タイプライターを、けつおけ！で演奏するのは今回で2回目である。タイプライターを楽器として用い、オフィスの喧騒を表現した実にユニークな楽曲だ。タイプライターソロは前回と同じソリストが努める予定であるので、前回も聞いている方からすれば、どれだけタイプライターが上達したかも見ものであろう。なお、タイプライターは、それを模したゴーストライターではなく、本物のタイプライターを使用する。タイプライターを知らない若い方々のために、タイプライターとは何かを説明しておく

と、バイオハザードでセーブをするときに使うあれだ。お分かりいただけただろうか。

　　フィドルファドルは、ヴァイオリンが活躍する曲である。フィドルというのは、ヴァイオリンの別称と考えてよい。民俗音楽で使われるヴァイオリンをフィドルと称する事が多いとされる。ファドルはあまり意味がないようだが、「ふざけた」などという意味になるそうだ。無理やり訳すならば「フィドル(ヴァイオリン)の冗談」とでもいえよう。話を戻すが、私としては、くだけた場で演奏したり、酒を飲みながら演奏したりするとヴァイオリンがフィドルになると定義したい。酒場で楽しげにヴァイオリンを演奏している人間を見たら「フィドルだ！」と言うのである。フィドル奏者が楽しげに演奏しているような酒場に行きたい。そこで美味しいビールが飲みたい。日本にはそういう酒場って無いんですかね。あったら誰か教えてくださいませんかね。あつ、すみません、高い店はダメです。リーズナブルで楽しくて山手線の圏内か横浜にあるお店がいいですね。未成年の諸君、アルコールは20歳からだ。また、節度を持って楽しまねばいけませんよ。飲みすぎて記憶をなくしたり、山手線を4周も5周もするような大人になってはいけません。

　　そろそろアンダーソンの魅力について語り尽くしたと思うので、これにて考察を終わりとしたい。

「そうッスか。さすが石原さんッスね。おい、今日だけは見逃してやる」

「石原さん、ジャイアント馬場じゃなくてアントニオ猪……！」

　　大林が何か言いかけたが、石原の次の発言によって最後まで聞かれる事はなかった。

「そういえば、今日ここにいるのって六人でしょ。ビールも六つ。で、急に思い出したんだけど、スター・ウォーズも六作公開されてるんだよね」

「ハッハー！☆　そーです

ね！☆」

　　林家パー子のような素っ頓狂な声をあげたのは、ヴァイオリンの青岩である。

「なんで六なんだ！　はちだろ！　八作！　はっさくはっさく！」

「ハッスルハッスルみたい

に言うのやめてくださいよ。古いし恥ずかしいから」

　　浪山が怪訝そうな顔で九保を見る。ヴィオラの内紛が勃発しそうな雰囲気だ。

「あたしは五作だと思っ

てますヨ！　思っ

つていうか信じてるっ

ていうか！」

「いやいや、信じてたつて事実と違っ

たらダメだから。スター・ウォーズは六作なの」

「六作とかマジバねッス。自分、

スター・ウォーズ見た事なくてサーセン。反省しやす」

　　石原に対する黒井なりの精一杯の敬語らしい。

「ハッハー！☆　私全部見ました☆　R2D2可愛いすまね☆　ハッハー！☆」

「とにかく、六が素数と関係ある事もさつき

の話で分かっ

てもらえたと

思うし、次はスター・ウォーズをやら

うではないですかと我は思わんとす。うぬ

たちはどう？」

「楽譜とかどうするんですか？　課金するんですか？」

　　大林はスマホゲームで課金するのが得意技だ。そのため生活が困窮しており、ヴァイオリンの弦も五年ほど張り替えていないらしい。

「か、かきん……？　カキーン！　打ったー！　大きい！　大きい！　大きい！　サヨナラホームラン！　やったー！　ベ

イスターズが勝ったぞー！　優勝の時間だあ

ああああ！」

　　石原はまだビールを二口ほど飲んだだけだが壊れたらしい。

「課金と言えば、骨折した時にギブスがすこ

く硬かったから、カキーンカキーンつ

て他の患者さんとチャン

バラっ

こしてましたよ。すごい嫌がられたし、めっ

っちゃ怒られたなあ。ははは！」

「課金するなら募金しろ」

　　黒井がイライラして懐に手を入れている。危険だ。

「はち！　はちほちほちほち！　ドウオはちやりたい！」

「素数！　素数じゃなきヤイヤ！　お！　ソスウー！」

「ハッハー！☆　C3POも大好きです☆　ハッハー！☆」

「横浜が優勝だあああああああ！　ほげえええええええええ！」

「はあ、早く帰って課金したいな……！」

　　六人ではなく七人いる事に気づいた者はい

なかった。

　　けつおけ！の会議は更けてゆく。

楽曲解説

交響曲第6番「田園」へ長調(*1) 作品番号68(*2)

この曲は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(*3)が1808年に完成させた6番目の交響曲(*4)である。交響曲は4楽章で構成されるものというそれまでの常識を打ち破り、5楽章構成になっている。ただし、第3楽章から第5楽章までは切れ目なく演奏されるので、途中でトイレには行けない。おわり。

第1楽章(*5):アレグロ(*6) マ(*7) ノン トロッポ(*8)「田舎に到着したときの愉快的感情の目覚め」
第2楽章(*9):アンダンテ(*10) モルト(*11) モート(*12)「小川のほとりの情景」
第3楽章(*13):アレグロ「田舎の人々の楽しい集い」
第4楽章(*14):アレグロ「雷雨、嵐」
第5楽章(*15):アレグレット(*16)「牧歌、嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」

-注釈-

*1)みなさんは音楽の授業でドレミファソラシドをハニホヘトイロハと習った記憶がないだろうか。その「へ」つまり「ファ」の音が中心となって繰り広げられる明るい曲調の事をへ長調という。屁長調ではないので注意してほしい。

*2)作曲が終わった順につけられる番号。つまりベートーヴェンが生涯68番目に完成させた楽曲という事。作曲家によっては順番通りになっていない事もあるが、気にするとキリがないのであまり気にしない方がいい。

*3)1770年12月16日頃に現ドイツのボンにて誕生。生涯に9曲の交響曲を残す。第9番は日本に於いて「第九」としてあまりにも有名。20代後半より難聴に苦しめられた。1802年には自殺を考え、「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれる遺書を書いたけどやっぱり撤回して生きた。1804年には交響曲の歴史に革命を起こす第3番「英雄」を書き上げ、華麗に復活。第九を作曲していた頃はほぼ聴力を失っていたと言われる。1827年3月26日没。現代において「楽聖」と呼ばれる、クラシック音楽史上最も有名と言ってよい超偉人である。

*4)複数楽章(4楽章が多い)から構成され、主に管弦楽により奏される大規模な楽曲。複数楽章のうち、一つはソナタ形式(注釈の注釈は面倒なので割愛しちゃう)であることが必要とされるが、例外ばかりなので気にするな。

*5)1番目の楽章だから第1楽章。スピード感溢れる快活なソナタ形式であることが多い。

*6)Allegro. 実に使い勝手の良い速度記号。とりあえずこれを書いておけば適度な速度で演奏してくれる。

*7)ma.「しかし」の意。「まあしかし」と覚えればよろしい。

*8)non troppo. ノンは英語のnotと考えていいんじゃないですかね、non troppoで成句のため、切り離す事はできない。「あまりはなはだしくなく」という意味。つまり第1楽章は「アレグロなんだけど、しかしながら、あまりはなはだしくないように演奏しろよ」というベートーヴェンからのお願いであり、どうしていいのかわかりません。

*9)2番目の楽章だから第2楽章。緩徐楽章(ゆっくりな楽章)である事が多い。この曲においては、小川のほとりを散策しているような気分になれたらいいですね。

*10)Andante.「歩くような速さで」の意。まさに小川のほとりを散歩しているような気分になれたらいいですね。

*11)molto.「非常に」「とても」の意。麦芽とは関係がない。音楽業界において宴会の席で「モルトモルト!」と叫べば「ビールおかわり!」の意味になる。わけではないので注意が必要。

*12)moto.「躍動して」の意味。2楽章は「歩くような速さでとても躍動して」。スキップかな?

*13)3番目の楽章だから第3楽章。メヌエット、スケルツォと呼ばれる舞曲である事が多い。この曲もまさにダンス。

*14)4番目の楽章だから第4楽章。それまでは4楽章が最終楽章となり、スピード感のある快活な楽想でフィナーレとなるのが一般的であったが、この曲においては5楽章へと繋がる嵐の場面となる。激しい雷雨が無数の音符によって表現されている。まさに芸術は爆発だ。

*15)出ました第5楽章。素数ですよ素数! 人類史上初の5楽章である事を嘸み締めながらお聞きいただくと、多少のアラは気にならなくなります。嵐が過ぎ去り、神に感謝する人々の気持ちを表しているような気がするのですが、果たしてどうだろう。

*16)Allegretto.「アレグロよりやや遅く」の意。アレグロより少し遅く演奏すればいいんですけど、時と場合によりますかね。

